

# 2017年度の最高学部4年課程卒業研究・2年課程卒業勉強について

文責：遠藤 敏喜（副学部長）

**概要** 本稿では、2018年3月3日（土）に自由学園記念講堂で開催された4年課程卒業研究・2年課程卒業勉強報告会での発表をもとに、各研究の概要を紹介する。あわせて、翌週3月9日（金）に開催された1・2年生の生活経営研究実習報告会の内容についても紹介する。

## 1. 卒業研究と卒業勉強

自由学園最高学部は4年課程・2年課程とも、自由学園での学びの集大成として、最終学年の1年間を通して研究活動を行い、成果を論文にまとめるとともに卒業前に開催する報告会で発表する。2017年度は表1に示す20本の論文が提出された。

4年課程の卒業研究は、3年次から2年間所属するテーマ別グループ研究のゼミナール指導教員と相談して、学生の自由意志で決める。ゼミナールは6つあり、世界と日本の文化、環境と経済・社会、ライフスタイル、人間形成と教育、自然の理解と創造、数理モデルとインターフェイスである<sup>1</sup>。最高学部の卒業研究の特徴としては、ゼミナールの学問領域の専門性を高めるだけでなく学問領域を横断する幅広い視野を大切にしていること、個人ではなくゼミナールの仲間をはじめとする学生間さらには学生と教員間の連携が強いこと、学生の興味・関心を研究に昇華させる方法を取るため外部の専門家の指導を仰ぐことが多いこと、生活に根ざした実践を伴うことが多いこと、などが挙げられる。

2年課程の卒業勉強は、クラス担任教員と相談して、1年次後半にテーマと指導教員を決定する。4年課程と異なり、十分に作法などを学んだうえでの研究活動というわけにはいかないので、卒業“勉強”と名乗っているが、行っていることは研究活動である。4年課程よりもPBL（Project Based Learning）の要素を強め、グループで行うことを旨とする。卒業勉強の時間は時間割に組み込まれている。

## 2. 2017年度の研究

2018年3月3日（土）9時から16時半まで自由学園記念講堂において開催された「2017年度の4年課程卒業研究・2年課程卒業勉強報告会」で発表された内容

<sup>1</sup>カリキュラム再編により、2018年度3年生から、テーマ別グループ研究は領域横断研究と経営実践研究と変わっている。領域横断研究はフィールドサイエンス、ヒューマンサイエンス、データサイエンス、ライフスタイルという4つのゼミナールから成り、領域横断研究はマネジメントゼミナールから成る。ゼミナールは改組されたが、卒業研究のねらいと進め方は概ね従来通りである。

をもとに、ゼミナールごとの研究概要を紹介する。紙面の都合上、個々の内容のすべてにまでは言及できないが、ご容赦いただきたい。

**世界と日本の文化** 差別における寛容を制度としてとらえて多様性社会の在り方を考察した研究、海外から美容に関する技術や知識を持ち帰り日本に美容文化を確立させた山野千枝子の実業家教育を津田梅子や羽仁もと子ら女性教育者との対比で考察した研究、学外研修で複数回留学したポーランドの生活の中に根付くカトリック信仰に端を発してポーランドの民主化の過程を検証した研究、などがあつた。報告会では、これら個別の研究をもとにゼミとしての問題設定“人を区別するものの一つは文化であるが日本人を日本人たらしめるものは何か”についても議論した。

**環境と経済・社会** 自由学園の農の学びと木の学びについて、自由学園開学以来行われてきた事項を抽出・整理・体系化し、東久留米地域、名栗地域その他フィールドでの調査・実践とあわせて、一貫教育内での長期プログラムの教育的・社会的意義を明らかにした。自由学園と地域双方の継続的かつ発展的な関係構築も探っている。

**ライフスタイル** 自由学園のブランディング（生活者や社会に他のブランドとの差を認知させ魅力を感じさせること）に関する研究であつた。5年前にも同ゼミで着手した研究であるが、今回再評価を行い、今後のための戦略を導いた。一例として、最高学部のオリジナルTシャツ・パーカー・スウェットパンツを、販売方法やプロモーションなども含めて、丹念なマーケティングに基づき、考案した。

**人間形成と教育** 小学生が外で遊ぶことが少なくなっている昨今の社会事情をふまえて、小学生が“遊び込める”場とは何かを探求し、研究成果を実際に具現化し

表 1: 論文題目・著者一覧

4年課程卒業研究	
世界と日本の文化	
1	差別・多様性・寛容 (木村玄織)
2	ソーシャルメディアの虚像と実像 (津田尚樹)
3	太平洋戦争以前の女性実業教育：山野千枝子による美容の導入と実践 (西山ありあ)
4	ポーランド「民主化」を考える：社会主義・労働組合・カトリック (本間優大)
5	わび・さびから見る日本の美意識 (横山智史)
環境と経済・社会	
6	地域との持続可能な関係発展に関する研究：一貫教育プログラムとしての農と木の学びの再構築に向けて (大塚萌・荻野早奈美)
ライフスタイル	
7	自由学園のブランディングに関する研究：自由学園の魅力の発見とその向上策の検討 (齋藤花・久保木葉奈・中嶋啓雄)
人間形成と教育	
8	協働による遊び空間の構築：自由学園初等部校庭での実践を踏まえて (井出光・興津耕助・上川仁・松島大輝・水野華奈)
自然の理解と創造	
9	土壌環境の変化による野菜の生育への影響 (宇谷充人)
10	自由学園の養豚における教育的飼育価値の考察 (梅崎太郎)
11	自然と人のかかわり：植物染色と自然布と抗菌性 (江村由理子)
12	立野川から海へ繋がる荒川についての関係性 (久保周平)
13	ピザ窯の作成：ピザ作りにおいて最適な窯の条件を探る (八重樫海)
数理モデルとインターフェイス	
14	フランク・ロイド・ライトの建築思想に関する一考察：現代の自由学園南沢キャンパスに見られる有機性について (岡田友樹)
15	新得共働学舎のアーカイブズ構築 (加藤紗矢)
16	生活教育絵雑誌『子供之友』に見られる子どもの生活：絵ばなし「甲子・上太郎」の統計解析 (藏原惟史)
17	裁縫の学びと ICT ツールの活用 (黒沼菜奈)
18	人はどのような写真に魅力を感じるのか (酒井健太郎)
19	Moodle を使った e-learning 環境の設計・構築・実践 (佐々木健太)
2年課程卒業勉強	
20	女子部の夏用式服と衣服ノートの改善策の提案 (浦田由希子・大木芽衣・栗田萌々子・曾我みやこ・高石梓・高橋ひかり・手塚天音)

た。放課後の習い事や公園・遊具の減少から、小学校の休み時間に着目して、実際に自由学園初等部に常設の遊び場「JIYU プレーパーク」を設置した。2018年11月22～23日に自由学園で開催された「おきな子発見！ U6 広場」でも一般開放し、好評を博した。

自然の理解と創造 5頭の豚の飼育実験から自由学園男子部における養豚の教育的価値を考察した研究、植物染色した繊維から織り上げた自然布の抗菌性について実験調査した研究、ピザ窯の形状・燃料・熱などの条件が焼きあがるピザにどのような影響を及ぼすか実験した研究、などがあつた。豚の飼育、染色と織り、窯の制作とピザ作りすべてが学生自身の手作りで行われ

ているところも特徴的である。

数理モデルとインターフェイス オープンソースの e-learning プラットフォーム Moodle を用いた学習支援環境を最高学部を導入しようとした研究、SNS 時代の写真との向き合い方として写真撮影の構図決定実験と撮影された写真の構図官能評価を行った研究、建築家 F. L. ライトの提唱した“有機的建築”の思想を探求した研究、新得共働学舎のデジタルアーカイブズを構築した研究、大正から昭和にかけて一世風靡した児童向け絵ばなし“甲子・上太郎”の記事のほぼすべてをデータ化して統計解析した研究、などがあつた。なお、他のひとは報告会当日に開催された日本教育工学会研

究会で口頭発表し、これについては次章で言及する。

**2年課程** 在籍する7人全員が共通して興味があった衣について掘り下げた。衣生活、衣服、設計と製作を総合的に勉強し、実践として、女子部の衣に関する課題に、女子部の担当の先生とともに向き合った。結果として、女子部の夏用式服を新たに考案した。女子部式服は10年前の2年課程卒業勉強から生まれたものだが、10年の節目に、生徒・保護者を対象とするアンケート調査をふまえ、改善することができた。生活講習や裁縫の授業で使用する衣服ノートのデジタル化にも果敢に取り組んだが、こちらは時間切れであった。

### 3. 評価

4年課程卒業研究も2年課程卒業勉強も、提出された論文をもとに、報告会での発表も加味して、成績評価される。論文は主査1名（これは主たる指導教員が担当）と副査2名（卒業研究の指導に携わっていない教員が担当）により評価される。2017年度は20本すべての研究が合格で、うち13本がA評価であった。

報告会の来場者にアンケート形式で感想をいただいたが、次のようなものがあった：「ライフスタイルの発表内容に即すならば、自由学園のブランド価値の最大のウリは“学生”自身であると思う」（一般）、「質問に必ず“ご質問ありがとうございます”と受けるのが好ましかった」（講師）、「指導教員の愛あるダメ出しがよかった。卒業生の鋭い意見も含めて学園への愛着を感じる」（講師）、「私自身これからも学び続けたい」（講師）、「プレゼンのためにまとめるというのはとてもよい体験である」（保護者）、「自由学園で学ぶことの意味がよく分かった。10年間の学びならではのよさをもっと世間に知っていただく機会としてほしい」（保護者）、「ひとりひとりが等身大の課題と向き合っている姿が感じられてよかった」（保護者）、「求人票をくださる企業の人事課にもご来場いただくとよいと思います」（保護者）、「さまざまな視点の研究の成果を聴くことができ面白かった」（無記入）。

研究を終えた学生は次のような感想をもった：「研究はひとつの区切りをつけたが、今後おのおのの中に生き、社会の発展に寄与したい」（梅崎ら2018）、「主観・客観の立場を上手に使い、具体的に女子部の生活に資するものを提案できて嬉しく思う」（栗田2018）。

2017年度の研究はとくに学外への働きかけが多かったが、その中からふたつほど特記すべきことを紹介す

る。ひとつは数理モデルとインターフェイスの黒沼であるが、2018年3月3日（土）に創価大学で開催された日本教育工学会研究会：プログラミング教育・LAで口頭発表した。見る楽しみ・作る楽しみを実感できる裁縫教材を動画付きウェブアプリで開発した（黒沼2018）。コンテンツとなるブラウス、ワンピース、スカートは型紙作成から縫製まで全てこのアプリのために自分で製作した。動画撮影と編集とウェブ制作も自身で行い、ウェブはパソコンとスマートフォンのどちらにも対応している。また人間形成と教育は、3年次の研究において、子どもの遊びが社会にどのような影響を及ぼすのかを探るための試みのひとつとして、第2回秩父市ウッドスタート（誕生祝い品）事業用の木のおもちゃデザインコンペに応募し、優秀賞を受賞した（遠藤2016）。

### 4. 生活経営研究実習報告会について

卒業研究・卒業勉強報告会の翌週9日（金）13時から15時には、同会場にて1・2年生による生活経営研究実習報告会が開催された。これは学生の報告会練習という意味合いもあるが、最高学部 of 行動的リベラルアーツの実践と言える生活経営研究実習の活動を学内外の関係者に知っていただきたいという思いと、学生が活動のまとめを通してSDGs（持続可能な開発目標）のステップにしてほしいという思いもある。高等科生に対してのガイダンスの意味合いもある（渡辺2018）。

2017年度の報告会は、農芸、庭園・自然誌環境（草本・灌木と樹木）、食、資源・エネルギー、図書・記録資料の6グループから、活動内容や今年度特有の試みなどの発表があった。簡単に活動内容を紹介する。農芸は、各部の農の学びのサポート、行事などの装飾に使用される花や鉢物の栽培・管理、新天地の整備と景観管理の面から、学園の自治生活に寄与する。草本・灌木は、学園内外に生育する野生植物の観察と必要ならば手入れを行う。春秋には自然観察会を催すなど地域との交流活動も行う。いわばまちの“生きもの係”として、自然環境の保全に取り組む。樹木は、樹木の剪定・枯枝の除去・竹柵の設置・枝からチップを作成するなど樹木管理ほか木々に関わる活動全般を行う。春には筍の収穫、夏から秋には外周生垣の整備・体操会の月桂樹の収穫、正月の門松設置などの季節の活動も伴う。10年毎の樹木調査も行っている。食は、ジャムやピクルスなどの保存食の研究、行事の際の食事の考案、しのめカフェの運営などを行う。今年は高島屋でのイベントにも出展した。資源・エネルギーは、施

設管理を担う。学校家具の修繕，専門業者の技術を用いた清掃など。毎年クリスマスにはイルミネーションを通して節電を考える機会とする。図書・記録資料は，図書館機能と学園記録資料を提供するアーカイブズ機能からなる。蔵書点検，雑誌登録，資料収集など。今年には体操会でデンマークとの交流史をパネル展示したり，11月のイベント「おさな子発見！ U6 広場」では絵本の読み聞かせも行った。

## 5. 結語

卒業研究・卒業勉強報告会の来場者数は，最高学部生・最高学部教職員を除いて，約 300 名であった。生活経営研究実習報告会の来場者数は約 100 名であった。近年様々な大学で卒業研究の発表会が外部に公開されるようになったが，自由学園では，創立者の教育理念に基づき，学部創部以来 50 年以上に亘って伝統的に行われている（遠藤 2004）。また，2015 年度から最高学部は，自由学園リポジトリ構想（自由学園の学術情報をデジタル媒体で発信する）の一環として，研究誌『生活大学研究』を刊行し，そのニュース欄にその年の卒業研究・卒業勉強について記事を掲載している。『生活大学研究』は，原著論文，資料，寄稿，ニュースからなるオープンアクセスのオンラインジャーナルである。リベラルアーツ教育に関連する研究と教育活動を促進するため，また，できるかぎり自由に研究成果や教育実践を発表できる場を提供することを目的とする。文部科学省所管の独立行政法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナル公開システム J-STAGE からデジ

タル配信されている (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jiyu/-char/ja>)。どなたでも自由に閲覧可能であるので，ぜひご覧いただきたい。

## 謝辞

文末となりますが，この場をお借りして，報告会にご来場のすべての皆さまにあらためて感謝申し上げます。あわせて，学生の研究指導にお力添えくださいましたすべての皆さまに深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- [梅崎ら 2018] 梅崎 太郎・大塚 萌・黒沼 菜奈・齋藤 花，“社会につながる研究”，学園新聞 第 700 号（2018 年 3・4 月号），自由学園出版局，2018。
- [遠藤 2004] 遠藤 敏喜，プレゼンテーションを通しての実践的情報教育の取り組み，平成 16 年度情報処理教育研究集会論文集，名古屋大学，2004。
- [遠藤 2016] 遠藤 敏喜，“人間形成と教育ゼミが木のおもちゃデザインコンペで優秀賞を受賞する”，自由学園公式サイト，<https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/s1/58005>，2016 年 10 月 29 日。
- [栗田 2018] 栗田 萌々子，“学びを発展させる”，学園新聞 第 700 号（2018 年 3・4 月号），自由学園出版局，2018。
- [黒沼 2018] 黒沼 菜奈，“教育工学会で卒業研究を発表する”，自由学園公式サイト，<https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/63441>，2018 年 3 月 8 日。
- [渡辺 2018] 渡辺 憲司，“生活経営研究実習報告会によせて”，2017 年度生活経営研究実習報告会予稿集，自由学園最高学部，2018。